

[様式14]

(対象事業：1 子どもを対象とした事業及びその開発にかかる事業)

事業名：あいち明治のものづくり
ワークショップ

事業者名：あいち明治のものづくりワークショップ
実行委員会

連携事業館名：愛知県陶磁資料館・七宝町七宝焼
アートヴィレッジ・七宝町七宝焼生産者協同組合

住所：愛知県瀬戸市南山口町234番地

TEL：0561-84-7474

FAX：0561-84-4932

HPアドレス：www.pref.aichi.jp/

①施設概要

あいち明治のものづくりワークショップ実行委員会
委員長 大野憲博

②事業の意図目的

愛知県を代表する美術工芸であり、主要な産業でもあった陶磁器と七宝は、近代には主要な輸出産業として海外に広く知られていた。この二つの産業が高い水準にあった明治期の制作技術・美の表現に迫り、愛知県の子どもたちに自分の住む地域に対する誇りとものづくりへの関心を喚起すると同時に、創作の可能性の広がりを提示することを目的に普及・教育活動の一環として本ワークショップを行った

③事業概要

実施タイトルとして「チョコレート大作戦!!」と題し、3日間に渡ってワークショップを行った。内容は、陶磁器と七宝の関わりの深かった明治時代の制作と美に触れるものとし、明治時代に伝わった石膏型成型技法（鋳込み）や西洋絵具を実際に用いながら、陶磁器・七宝制作ワークショップを行った。ワークショップ全体をチョコレート作りになぞらえた内容とし、参加者の興味・関心を喚起した。また、展示室にて明治時代の作品を鑑賞し、次に自分たちの手で完成作品を展示し、明治時代の作品とコラボレーションした（1週間展示）。最後に本物のチョコレートを食べ、チョコレートと陶磁・七宝作品の共通点を説明し、また感想を述べ合うティーパーティーを行った。

④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物 テキスト ワークシート その他（広報チラシ）

作成した報告書等

ビデオ（

冊子（

その他（

⑤参加者状況

参加者人数 延べ 86人

内 訳

小学生77人 中学生9人

(1) 事業の実施状況について

実施の日程と内容：

1月20日 ワークショップ チョコ・デ・クマ制作 チョコ・ナ・ボックス制作

会場：愛知県陶磁資料館 担当：佐藤一信

講師：内田恭子（陶芸作家） チョコ・デ・クマ担当

植葉香澄（陶芸作家） チョコ・ナ・ボックス担当

チョコレート大作戦の初日は、チョコ・デ・クマの制作から始めた。

明治期に西洋から導入された石膏型成形技法（鑄込み技法）は、石膏型に泥漿（液体状の粘土）を流し込み、型に余分な水分を吸収させ形を作るもので、中に空洞のあるホローチョコレートの作り方とよく似ていることから、チョコレートによくあるクマの形をしたオリジナルの貯金箱を作ることとした。

このプログラムの実施にあたっては、単に工程をこなすのではなく、参加者自身の発見や感動を促すよう努めた。例えば、写真1のように、素材の発見と驚きを体験させるため、泥漿にあえて手を入れてみるなど、担当者が準備段階で気づいたことを盛り込んで進めた。

型からまだ柔らかい作品を取り外すというかなり難易度の高い場面も、クマの形は参加者が自分で取り出すまでわからないというドキドキ感とともに、2人1組となって、全員が難なくクリアした。

チョコ・デ・クマに続いて、チョコレート形の蓋物に洋絵具で絵付をするチョコ・ナ・ボックスの制作を行った。

チョコレート形の蓋物も既成のものではなく、原形から鑄込みで作ったオリジナル品であり、使用する30個を制作準備することは、想定以上の困難を伴った。

このプログラムでは、絵付のテーマを「みんなが見たこともないようなステキなおかし○○○」とし、例えば、おかしのお家、おかしにあつまる動物などを、自由に描いてもらった。また、ここでは従来の和絵具と明治期に伝わった洋絵具の違いを実物をもとに説明し、素材の美しさに触れや、陶磁器の模様を描くということ意識することを重視した。

（佐藤一信 愛知県陶磁資料館）



写真1 泥漿に手を入れる参加者



写真2 型からクマをはずす参加者



写真3 七宝制作工程を見学

2月3日 ワークショップ チョコ・アラ・キーホルダー制作

七宝焼制作実演工程見学 作品鑑賞（ワークシート活用）

会場：七宝町七宝焼アートヴィレッジ 担当：小林弘昌

講師：平野敦子（アトリエパコ） 伊藤のり子（アトリエパコ）

チョコレート大作戦第二弾は、2月3日（日）、近世の終わりに作られ始め、明治期に大きく発展した「尾張七宝」発祥の地にある七宝町七宝焼アートヴィレッジにて開催した。

今回のチョコ・アラ・キーホルダーの製作は、板チョコをイメージした形の台の上に七宝釉薬でデザインした銅板をのせたキーホルダーを制作するというものである。主催者から出した指令は、デザインの共通テーマとして、参加者自身が板チョコレートにのっているといいなと思うものを図案化して作ることとした。

参加者のほとんどが七宝制作の経験が初めてということから、最初に七宝焼の素材や製作法が陶磁器とはまったく異なることの説明をうけた。続いて、七宝釉薬の扱い方などを学んだ後、制作にとりかかった。前回のワークショップで扱った陶磁器用の絵具と七宝釉薬との違いに最初はとまどっていた参加者も徐々に慣れてくると、思い思いのデザインを描きながら、七宝釉薬を素地の上に色分けして盛りながら作り上げていた。

制作が終わると、館内の七宝職人の実演コーナーにて、工程順に伝統的工芸品「尾張七宝」の制作の様子を学芸員の説明を聞いたり、それぞれの工程で働く職人に直接質問したりして、学んだ。

その後、作品展示ゾーンにて、明治期を中心とした近代七宝の発達の歴史を学び、ワークシートを使いながら七宝の名品を鑑賞した。

ほとんどの参加者は七宝焼についてこれまで漠然としたイメージしか持たずにいたため、今回初めて具体的に七宝について知ることができ、また、明治時代には七宝が国を代表する工芸品の一つであったことを聞き、身近な土地に残る伝統工芸の歴史に驚いていた。

(小林弘昌 七宝町七宝焼アートヴィレッジ)



写真4 参加者による完成品の展示



写真5 明治時代の作品を鑑賞



写真6 締めくくりのティーパーティー

2月10日 制作作品の展示（作品展：2月10日～17日）

作品鑑賞 ティーパーティー

会場：愛知県陶磁資料館 担当：佐藤・小林

チョコレート大作戦の締めくくりとして、完成作品の参加者自身による展示と、同じ展示室内に展示した明治時代の陶磁・七宝作品の鑑賞を行った。

作品のセルフ展示は、焼成後の完成品をよく見て、着色した色絵具の変化や大きさの変化に気づかせるために行った。写真4のようにリボンやセロファンも用いて、色鮮やかに楽しい雰囲気の展示となった。

作品鑑賞も、自分たちが鑄込み技法の難しさや西洋絵具と和絵具の違いなどを体験した後とあり、実感をもって鑑賞している様子が窺えた。

最後となったティーパーティーは、用意した本物のチョコレートを食べながら、ワークショップ内容を締めくくり、3日間の日程の中で、参加者同士も担当者とも打ち解け、和気あいあいとしたトークで終わることが出来た。

(佐藤一信 愛知県陶磁資料館)

(2) 地域との連携について

愛知県陶磁資料館、七宝町七宝焼アートヴィレッジ、七宝焼生産者協同組合の3者で連携したことによって、陶磁器と七宝という当地域を代表する伝統工芸、産業を広い視点に立って深くしっかりと体験・理解する内容とすることができた。

また、愛知県陶磁資料館におけるワークショップのスタッフおよびボランティアとして、近隣地域の大学で陶芸を学ぶ学生や卒業生に参加を呼びかけた。これは単にプログラムを補助するだけでなく、美術館におけるワークショップ、普及教育事業の重要性を認識してもらう機会と捉え、同時に、地域の文化、産業について知る学びの機会とした。

当地域では「産業観光あいち」という官民が一体となったプロジェクトが進められており、愛知県陶磁資料館、七宝町七宝焼アートヴィレッジもその一員として活動に参加しており、そのシンポジウム会場（平成20年2月5日）において、当事業の内容について紹介し、より広範囲に当事業の成果を知らしめることが出来た。

(3) 参加者の反応

参加者の感想から：

「チョコ・ナ・ボックスを作ったときはこんな色がきれいな色になるの？と思いました。チョコ・デ・クマを流し込んだときはドキドキしました」（4年生女子）

「チョコ・デ・クマを作った時はチョコレート色（※正しくは灰色）だったけど、焼いた後に見てみたら白に変わっていたのでびっくりしました」（4年生女子）

「焼いていない貯金箱（チョコ・デ・クマ）は最初ふによふによの粘土だったけど焼いたらすごくかたかったです。」（4年生・男子）

「こんないい体験ができて良かった。チョコ・デ・クマとチョコレートの作り方がよく似ていてびっくりした」（6年生女子）

「キーホルダーの絵は、最初粉に水がつけてあったものをたらして焼いたら本当に塗ったようになりました。焼き物（※正しくは七宝）の力は凄いと思いました」（4年生男子）

「砂の絵の具（※七宝絵具のこと）を使ってつやつやしたものになることは知らなかった」（4年生女子）

「七宝はぬるのが粉だった。七宝は700度で焼くことを発見した。せとものはチョコレートの作り方と似ているのでびっくりした」（4年生男子）

「面白かったことは七宝が土器ではなかったことです」（5年生男子）

「石膏型や七宝焼など一つの物を作るのにたくさんの努力や多くの人との協力が必要だと実感しました」（中学3年生女子）

(5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

今回、ワークショップを担当した2館の学芸員は、子どもを対象としたプログラムの実践を既にある程度の経験しており、企画・実施にあたっても十分に協力して行った。

その上で、芸術拠点形成事業は今後のモデルとなる事業であり、優れたワークショッププログラムの開発が期待されていることから、敢えて従来試みていない内容にも取り組んだ。通常のワークショップと比べて、準備段階からワークショップ当日まで多くの時間をかけ、多くの困難な課題を乗り越え、達成することが出来たことは、担当者の大きな自信となり、今後の更なる独自プログラム開発の促進に効果があったと言える。

その内容については、参加者のワークショップ中の反応や感想から、十分な効果を上げたと確信している。

但し、細かな反省点は多々あった。担当者の経験・知識不足により、ワークショップ内容の小変更を余儀なくされたことなどである。例を挙げれば、上絵付用の金彩は匂いがきついため、参加者に自由に使用させることを止め、事前に一部だけ塗ることとしたことなどである。これも十分な経験と準備があれば、回避できたことであり、今後プログラムの改善を図っていききたい。

通常であれば、連携の難しい異なる自治体の連携ができ、参加者の立場に立ったワークショップ内容とすることが出来たことは当事業の成果であり、プログラム開発が共有出来たことも大きな成果であった。これを機に当事者による更なる連携によって当地域の芸術拠点形成を推進しなければならない。

(6) 新聞記事等

○新聞記事

↓130.0cm

朝日

07.11.27(火)朝刊アート

磁器に親しむ チョコ大作戦

愛知県陶磁資料館(愛知県瀬戸市)と七宝町七宝焼アートヴィレッジ(愛知県七宝町)は、来年1月から2月にかけて小中学生を対象にしたやきものと七宝焼のワークショップ「チョコレート大作戦!!」を開く。文化庁の助成事業でチョコの形をした磁器の箱やキーホルダーに、絵の具や七宝絵の具で絵を描いたり、クマの形の貯金箱を作ったりする。

開催日は08年1月20日(日)、2月3日

(日)、10日(日)の午後1時から。会場は、陶磁資料館(1、3回目)と七宝焼アートヴィレッジ(2回目)。

対象は小学4年生から中学3年生までで、全回に参加できる人に限る。定員30人。希望者は往復はがきに住所、氏名(子どもと保護者)、子どもの学年、電話番号を書き、〒489-0965 瀬戸市南山口町234、愛知県陶磁資料館「チョコレート大作戦!!」係まで。締め切りは12月20日。定員を超えた場合は抽選。問い合わせは☎0561・84・7474(同館)。

ギャラ

●喜田小夜う」12月
尾張旭市柘
龍屋(0561
をモチーフ
画31点。
●川寄豊

朝日新聞(愛知県版) 平成19年11月27日(火) 朝刊 アート欄

○テレビ、関連誌等

西尾張CATV クローバーテレビ「タウントピックス」
平成20年2月9日～2月15日(5分程度放映)